日本小說
代表作全集

昭和二十四年・前半期

20

川端康成
井伏鱒二
間宮茂輔
編輯

小山書店

編輯代表者　川端康成
發行所　株式會社　小山書店
代表者　小山久二郎
東京都千代田區富士見町二ノ一二
電話九段（23）六八四・六〇〇六
曉印刷株式會社印刷
山田製本所製本

昭和二十四年十月十五日　印刷
昭和二十四年十月二十日　發行

日本小說代表作全集　第二十卷

定價　230円
地方賣價　240円

圖書券以下ヲ切取リ濟ミノモノハ返却
貴斷り

目次

軍樂　なかの・しげはる　三
實母の手紙　志賀直哉　一七
大臣　三島由紀夫　二九
黑い影　阿部知二　四五
波の上　石川悌二　二二
本の話　由起しげ子　一三七
魔谷　中山義秀　一六一
朝鮮ヤキ　讓原昌子　一八九

夢幻泡影　外村繁　二〇七
O氏とその周圍　正宗白鳥　二三一
牛肉　林芙美子　二四五
黄色い日日　梅崎春生　二六九
野狐　田中英光　三〇五
結婚　平林たい子　三三一

昭和二十四年前半期主要雜誌掲載小説目錄

編輯者の言葉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

軍樂

なかの・しげはる

千九百四十五年八月すえのある日、一人の兵隊服をきた男が、澁谷から日比谷の方へあるいていた。

男は一週間まえに兵隊から出てきていた。彼は、日本が降參する二タ月まえに召集され、ある山國の村へ行き、そこで八月十五日をむかえ、それからなお一月その村にいて、そのあいだに——つまり戰に負けてから一等兵にすすみ、一週間まえ、毛布一枚、雨外套一枚、ゴムの水筒一つ、玄米二升、「糞釜菓子」すこしなどを荷物にして東京の家へかえつて來たのであつた。

男の家には留守居がいた。子供の五人ある夫婦の印刷屋で、手でうごかすタイプライターほどの機械をつかつて、名刺だの保險會社のハガキだのを、朝はやくから夜おそくまで音をたてて刷つていた。

印刷屋と男とのあいだにはもと緣もゆかりもなかつた。戰爭がそれを近づけたのであつた。强まつて來た爆擊、かためて燒けだされた人々、その人々は、東京のなかで、また近くで、燒けのこつた親類・緣者をさがして身をよせた。男の住んでいた地區は最後までのこつたから、こうして新しくはいつて來た人々で人口がふえてさえいた。男の隣組にも何軒かそういう家があつた。二間三間の小家で、受けいれた方と逃げて來た方との二タ所帶の全員が、夜ごと、闇のなかで、鳴りやんで行く警報の下でだまつて身支度をした。

そこへ第三の所帶がおちのびて來ることがあつた。第二の所帶とで一ぱいのところへ、七人家族の印刷屋が、仕事道具と紙とをかかえて今朝辿りついたという家がここの隣組にもあつた。男の家でいえば、それは、二十何年まえの檢査で丙種合格になつた男が、四十五にもなつて思いがけず兵隊に取られるということになつて四日目であつた。男

の妻は、一人の子供をつれて田舎へ行こうとしていた。家をどうするか。下層の隣組で、事は手がるに運んだ。男とその家族とが歸つて來たときには空けるということにして男の家へ七人家族が移つてきた。

このことで、男の妻と印刷屋とのあいだで證文は取りかわされなかつた。男の妻が男に相談するということも、男の行きさきが分からなかつたからできなかつた。

面倒・厄介の豫想される家の問題で、二つのことがあつて約束の實行を保障していた。戰爭が間もなく終るだろう、日本が負けて終るだろうと思われていたこと、印刷屋にも男の妻にもそう思われていたことが第一であつた。戰爭がすんだらすぐにも市内へ戻らねばならぬ。寺や畑や雜木林の多いここいらで、まつたく新規に、七人口を印刷屋でやしなつて行くことは印刷屋に考えられなかつた。また印刷屋には、三十年以上やつて來たものとは別な仕事をはじめよう氣も毛頭なかつた。彼は、市内ではどこへ家をさがそう、それからこうしてこうして……という目論見さえある程度はつきりしていた。男の妻の方でも、すぐにも東京へまいもどる肚でいた。双方のつもりは、結局戰爭がもう終るだろうという考えに基づいていた。そのことが最初の話しあいで双方に讓めた。口にも出さず、頭にも自覺しなかつたが、お互いに讓めたという心持ちが事をすらすらと運んだ。今から二十年ほど前、東京で非常に大きな印刷工のストライキがあつた、それは規模も大きく、性質も深刻なものであつた、そのときのストライカーのなかにこの印刷屋がいた——印刷屋のこの經歷が第二のことであつた。首きられた印刷屋は、それからの二十年を個人經營の印刷屋としてやつて來た。そのとき首きられた一人は、首同士共同ではじめた印刷屋をしながらそのストライキを小說に書いた。それは名高い作になり、たくさんの人に讀まれた。しかし戰爭の波が、ますます高まりながらその小說と小說家とを呑みこんで行つた。その小說は古本屋の棚にも見えなくなり、今では小說というもの、小說家というものが變つていた。その後その小說家には個人としての不幸も重なり、今は政府にたいし小さくなつて、妻にさえ死なれてからく生きていた。二十年まえのストライカーはその小說を讀んでいた。彼にはその作に不滿と意見とさえあつた。

彼は小説をくり返しては讀まず、その後その小説本をなくしてもいたが、不滿と意見とは、いいかえればこの小説家についての誇りと親愛感とは、生活の變化で少しずつかわりながら彼のなかで生きていた。それだから、二十年間ハガキ一本かかず、ここへ來てからも訪ねて行こうとはしなかつたもとのこの仲間が、つい近所に住んでいることを印刷屋はよく知つていた。兵隊に取られた男と小説家とは近しい間柄であつた。男は社會主義者だつたから、戰爭になつたあくる日檢擧されて、それからずつと通いでしらべられていた。わたしは社會主義者である。わたしはこの戰爭を帝國主義侵略戰爭として認めてこれに反對する。わたしは日本に社會主義革命を成功させねばならぬと考えている。今までのわたしのすべての言動はそこに集中していた。そのことをわたしは改めてしかと認める。そう警察は男にいわせようとした。それは社會主義者として認めていいことであつた。しかしそれを、勞働人民にはかくして、警察にだけ認めることはよくなかつた。一ト月、二タ月、三月、半年、一年、二年、三年と續くうち、男には、相手のいいなりに認めようかと思う瞬間があつた。いまに戰爭が終るだろう、日本が負けて終るだろう、そのときまで引つばらねばならぬという考えが男を思いきりわるくささえて來た。召集令狀が來た日まで男は警察へ通いつづけた。印刷屋はそこまでは知らなかつた。しかし印刷屋は、話しあつている女の亭主があの男であり、その男は、あの小説家と近しい間柄であるにちがいないということを、二十年ほどの間の何やかやから知つていた。その通りであることがぢきに知れた。小説家を入れて、一つの連帶、一つのソリダリテが帶のように彼らをくるむのを印刷屋と男の妻とが感じた。それは、家のあけわたしには關係なかつたが、もつと土臺のことであつた。男の妻は安心して子供をつれて汽車で立つて行つた。

このことが男には十分には知らされていなかつた。男には、兵隊から歸つて、はじめて見た留守居の印刷屋から聞かされて全體がのみこめた。多くの人間のあいだを裂いた戰爭が、一方ではむすびつけた組の一つがこれであつた。

男は汗を拭いては歩いて行つた。男はある知合いを訪ねるためにあるいていた。あの小説家はいま東京にいなかつ

た。食う仕事をどこに見つけるか、社會主義者としての仕事をどう組みたてはじめるか、そのメドをつけるために訪ねるのであつたが、それよりも、メドをつけようという氣を自分のなかに起こさせるために訪ねるという方が正確であつた。ながく孤立してさいなまれて來たため、男の精神は一人前らしくないものにしなびていた。仕事を國民の手にわたすまいとして、春以來祕密にことを運んで來た大資本家階級の目論見はこの男にも利いていた。戰爭の終結は、國民にたいする最大のふい打ちとして絶對に上から打ちおろされねばならなかつた。頃あいを見はからつていた大資本家階級が「よし！」と命令した。天皇が幕を切つておとした。新しい内閣がすべてのものをかくしこみ、腰くだけてすわりこんだ人々を追いたてて證據書類を燒かせた。山のなかの村で、男の部隊も二日間書類を燒いた。そこから何かを取りだして來るため、「よし！」といつて立つて行く氣に男はなれなかつた。よろこびが來たときに途まどいが來たのでもあつた。男は書類燒きすての使役を斷つて筵の上でごろごろしていた。しかし食うものと着るものとが逃げるだろう！　印刷屋の方は家さがしをはじめていたから、男の方は、食う仕事、息をふきかえすための準備の手だてにかからねばならなかつた。久しぶりに東京を見たいという欲望も大きかつた。まる一年以上男は街なかへ出ていないのであつた。

想像していた通りともいえたが想像以上だつたともいえた。すべてが乞食のようにつぶれて、うすぎたなく無氣力に横たわつていた。見かける人という人が衰弱して見えた。大轉換が夕立のように空で鳴つている下で、見覺えのある街が、一そう破れ、一そうみじめになつただけで、大轉換などは上で鳴つていないかのような姿で下にあつた。男は、次第に市の中心へ近づきながら、外國の街へはいつて行くような心持ちで下つて行つた。

「ここだつたナ……」とあるところで男は立ちどまつた。一年以上まえのある日、男はここで眞上を艦載機に通られていた。警視廳に呼びだされての歸り、前をあるいていた男がいきなり伏せたので本能的にならつたのであつたが、怖れる暇もないほどすべてが速かつた。その飛行機はあまりに低く飛んだため何かに衝突して落ちた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「ここだつた。あすこだ……」

廣い通りは元どおりに、一年前にはあつた片側もなくなつて一そう廣くなつてあつた。暑い日の照る下で、一面の燒野が原が燒野が原のまま、元は大きな建物の並んだ繁花街であつた俤を殘して廣いコンクリート道路を谷間の方へ走らせていた。見晴らしの利く高みで、そこに人影がまつたく見えぬため、一年まえのことを夢のようだつたと思いかえすことさえ嘘のように男に見えた。毒々しく伸びたヒマの葉がさわるのを除けて男はあるき出した。

「兵隊で歩いたから脚は大丈夫だゾ……」

そういうことをうつけて思いながら男はあるいて行つた。そのとき飛行機の音がきこえた。男は隱れるところがないのに隱れようとする衝動を感じて思いとどまつた。雲の一切れもない空を、見たことのない型の飛行機が一つ、三四間右手の見當で音をしているという恰好で美しい銀色で飛んでいた。戰爭はつまりすんだんだよ、飛行機が來てもあわてるには及ばんのだよと男は自分にいいきかせた。人はどうなのかまだよく分からなかつた。

あたりが賑やかになつて來たのに男は氣づいた。さほど大きくない店屋がかたまつて兩側殘り、人の出入りが見られ、店さきに水が打つてあるのに活氣が感じられた。店のものと見える若い男が出て來ながら笑顏をした。男は、それが自分にむけられたものでないと分かつたがそこの店を見た。飾り窓に燒物類、塗物類が見えた。近よつてみると、小さな段々の上に、人形、ヒナ、袋物などが並べられ、奥わきには鼓と飾り太刀とが置いてあつた。氣がつくと軒並みに同じ店で、いかにも珍しいと見えるものにまじつて、素人にも一と目で似せものと分かるものが獨特の粗末さで並んでいた。店によつて外國人のうしろ姿が見えた。どの店のものも衰弱して見えぬのが男の目についた。笑顏のまま向いがわの店へはいつて行つたさつきの男は、伸びて來た髮を青々と光らせて、ツンとすじの張つたズボンの下で眞新しい草履を白い素足につつかけていた。

「そうだ……」

日比谷が近くなつたことに氣づいて男はそこで辨當を使おうと考えた。公園そのものも見たかつた。木蔭、ベンチ、飲み水があるだろうと期待された。晩めしにはまだまだ早かつたが、朝めしをおそくして、晝とも晩ともつかぬ辨當を持つて出ていた男は腹がへつていた。

「それから警視廳と裁判所とを見てやろう。」

男は八月のはじめに檢事局へ手紙を出していた。事件はどうなつたのか。憲兵隊へ移さぬのか。必要ならば隊の許可を得て出て行つてもいい。何分にも返事をくれ。それは一歩踏みこむというほどの强さのない瀨踏みであつた。妻が田舍へ行つたあと男は東京と連絡が切れていた。檢事局は戰爭がすんでからも返事をよこさなかつた。男には、帝國降伏で警察・檢事局がわが解放された氣になつてほつとし、この四五年中、それ以上拘束されぬため男のして來たあれこれの努力がそつくり醜さとして殘された思いがして口惜しかつた。ハガキの返事でもいい、文面で氣のすむ取りかえしが出來ようにと思えたが、强要する手續きが分からず、歸つてから外へ出かけて行く暇も今日までなかつたのであつた。

「あいつら、まだいるのだろうか？　齒のあいだへ火箸を打ちこんだり、無垢な娘の陰毛を燒いたりしたあいつら、まだいるのだろうか？　まだいるのだろうか？」

目まいのするような感じと、一と思いに乘りこんで行く氣になれぬ氣持ちとが男のなかでまじり合つた。爬虫類のような警視廳……外がわからだけ、見て置くだけでも見て置きたいと男は思つた。

三つほどの狀景が男の頭をよぎつた。

調べ室での一幕を終えて休憩室へ出ている男がそこにいた。そこは二階で男は窓ぎわに腰かけていた。隣り屋敷の木が見え、ぬか雨の降つている鋪裝道路の一部が見えた。道路は窓ぎわに接していた。ここへ自動車をつけて、飛びおりるなり走りだす。逃げられる……逃げたい！……生まれてはじめて男は本當に「逃げたい！」と思つた。すると男

は、自分のしている仕事、自分の考えている勞働者階級に、今まで知らなかつた殆んど肉體的な愛着を覺えた。胸を彼は射投げるように伸ばしたかつた。「おお……」と彼は長く引いて心で叫んだ、「おれは逃げたいぞオ。逃げて働きたいぞオ……」

自動車で走つている男がそこにいた。男のほかにもう一人の男と女とが乘つていた。一月末の夜であつたから、彼らは厚着をした上しつかりと外套にくるまつていた。前ランプの灯が扇型にひろがつて動いて、車はひろい大カーヴを曲がろうとしていた。上體を曲げてつぶした聲で、女が、「いるのよオ……」と低くいつた。警視廳前であることが男二人にもわかつた。そこのどこかの部屋で、女の愛人が、裸にされた背中へ手錠をかけられた兩腕をくくりつけられて、まつたく火の氣なしで口を閉じているのであつた。今思いだしている男は、裸にされている男たちをある程度裏切つていたのであつたから、そのことを思い出してもいない女の短い訴えは錐のように男に刺さつた。

三階の部屋へ代りの炭酸紙を受けとりに行つている男がそこにいた。三階の容子はすつかり變つていた。カーテンはすべて灯の通らぬ厚地の黑幕になり、部屋全體の書類が非常に減り、私服のものも殘らずゲートルをつけていた。彼らは以前よりもずつと横柄になり、炭が足りぬため押收して來た本類を火鉢で焚いてあたつていた。煙のなかを、モンペをはいた給仕の娘が男に茶を持つてきてくれ、次手というようにしてわきの棚から本を取つてびりッと破いてくべた。男は、兩方の表紙からちぎつて來てまん中だけ殘つた分が娘の手にあるのを見あげた。一つだけ大きいAgrarfrage というドイツ語が目にはいつた。「農業問題か……」男は、その本を取られた人間のためよりも本そのもののために顏をそむけた。

「まだいるんだろうか？　まだいるんだろうか？……」

そのとき男はおびえたようにして電車線路を越して道路を反對側へ渡つた。

「こら、日本の兵隊！」

そういうことをいわれはすまいかという氣がして男は二十間ほど先きへ來る外國兵のかたまりを見た。男にはどの國の兵隊とも見わけられなかつた。兵隊は五六人で、非常に清潔な、洗いたてのような着物を着て、どれもまだ若く、もつれるようにして話しながら近づいて來た。

「そんな……筈がない。」とも男は思つた。道理にあわぬようなことが、合わぬようにも合うようにも思われて男の頭を走つた。

そんな筈はない。そんな筈はなかろう。男は、部隊そのものがそうなのであつたが、一度として外國兵とたたかつたことがなかつた。外國兵を見たことさえもなかつた。彼らは、戰爭のあいだ中、一挺の銃も一本の劍も持つていなかつた。敵の飛行機が來ると、山地にはさまれた隱れ場のない河原で、彼らはただしやがんだだけで飛行機の去るのを待つた。河原續きの飛行場にいた壹機の練習機は、警報が鳴ると勢いよく舞いあがつてどこかへ行き、警報が解除になるとどこからか歸つて來た。八月十三日になつて本ものの戰鬪機が二豪來た。十四日の朝、敵の飛行機が來て、練習機には手をつけずにその二機だけを燒いて行つた。男たちは決して外國兵を苦しめていなかつた……

しかし男は、外國兵たちの正式の軍服が平和的に、自分の星を取つた帽子、肩章をむしり取つたかばかばの夏衣袴が軍國主義的に見えるという意識から逃れられなかつた。戰鬪帽、その下の坊主刈り頭、汗にまみれた汚い黑い顏、やせたからだ、洗濯でスジになつて禿げた上衣、ズボン、膝下のつぼまり具合、そういうすべてがすべての辯解を越えていた。それはつまらなかつた。それは野蠻であつた。

「君ら何でじつとしていたんだ。おれたちあすこまで來てたじやないか?」

そういわれたら一言もないという感じが男のなかに出ていた。服裝の清潔さと美しさとがそういつているように見えた。

「そんなことといつたつて仕方がなかつたじやないか……」といつて苦笑することが、國內的には通つても國際的には

通らぬひろい間に合わなさが男によく分かつた。外國兵たちは男に目もくれずに反對側をすれちがつて行つて男は市政會館のところへ出た。

「ほ、殘つていたな。交番も殘つていたな……」と男は見まわした。大きな建物がそろつて殘つていた。たくさんの自動車が走つていた。外國兵、外國人の姿が目についた。日本人も急にたくさん歩いていた。交番の巡査は見えなかつた。

「こつちから行こう。」

男は並木道へ出た。ここでは、さつきと違つてたしかに、ざあッと鳴つている下で轉換が行なわれていた。破壞されなかつた見覺えのあるままの街、それがそつくり見覺えのあるままで別ものになりつつあつた。男自身、自分が場ちがいのところへ來ているような感じから逃れられなかつた。

「これだけが元のままだ。」

男は、トチの葉を食いあらしている昔どおりの虫に氣づいて市政會館まえの廣場へ切れた。その端に、築山よりに飲み水とベンチとがある筈であつた。

「野球かな?」

しかし野球ではないらしいと思いながら男は人だかりへ近よつた。人だかりは矩形の人垣をつくつていて、矩形のなかで外國兵が動いていた。そして音樂がきこえていた。

矩形の向う端に三隊の兵隊が見えた。二つの隊が、一隊は四十人ほどずつで、音樂をしていた。殘りの一隊は、その方が大人數に見えたが、銃を持つて止まつていた。

指揮者が先頭をすすんで、第一の音樂隊が吹奏しながら前進した。第一の隊がある地點まで進んだとき、第二隊が同じく吹奏しながら前進に移つた。銃を持つた隊が第一音樂隊の元いたところへ動いた。そして第一音樂隊が第二音

樂隊のいたところへ、第二音樂隊が銃隊のいたところへ移つた。全隊形が逆になつたところで別の音樂が起つた。音樂はどれも、ジャズなどとはちがつた、行進曲などともちがつたものに男に聞かれた。

音樂が終ると銃隊から小隊長のようなのが出てこつちへ歩いて來た。見ると、矩形の對邊のところに壇が出來ていて、小學校の教壇のような質素な壇の上に隊長と見えるのが立つていた。小隊長のようなのがその前まで來て止まつた。そして兩方で、非常に速い、擧げたと思つたとき下がつているような敬禮をした。それから小隊長のようなのが何かいつた。報告をするという形に男には見えた。

人垣のなかにはアメリカ兵がまじつていた。服裝からして中の兵隊もアメリカ兵と思われた。人垣のなかのアメリカ兵は、腰に手をあてがつて見物しているのであつた。第一の報告者が歸つて行つて第二の報告者が出た。それから第三の報告者が出た。男は非常なちがいを發見したと思つた。

それは敬禮の仕方にあらわれていた。報告の仕方にあらわれていた。歩き方にあらわれていた。報告者は、「物をいう」聲で、いわば話していた。男には、距離もあつたが一語もわからなかつた。

「えへッ！　何だその聲。大きく、もつと大きく、もつと大きくだッ……」

短い兵隊のあいだ、年とつた新兵たちがはたきこむようにどなられて、大聲を出そうとして用向きを胴忘れするというようなことはここにはないらしく見えた。二等兵が折箱のように手をあげ、それをじろつと見た軍曹が指をばらばらにした手をあげ、それを下げ、それから二等兵が、ズボンの縫目へぱたッと音を立てて手を下ろすというようなこともここにはないらしく見えた。彼らの歩き方は、靴底がちがうのであろう、音を立てなかつた。地面を踏みつけるというより、からだを進めることがここでの目的であるように見えた。一人の時も隊のときも、人間がすつすつと動いてどたりどたりしなかつた。男は目をはなさずに汗を拭いて見續けた。

もう一度あたらしい音樂がおこつた。第一音樂隊、第二音樂隊、銃隊とも靜止した形でそれがひびいた。それは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.